



Interview
No. 2
健一自然農園
耕作放棄茶畑の再生

耕作放棄された茶畑は資源の宝庫 自然栽培によるお茶づくりで 茶畑を再生させる

2001年から大和高原にある耕作放棄された茶畑を地域の方々から受け継ぎ、農薬や化学肥料を一切使わない自然栽培でお茶づくりをしている「健一自然農園」。農園で一番人気の「三年晩茶」はお茶の木の枝や茎を使って作られます。この「三年晩茶」の製法が注目され、2021年からは天理市福住地区の耕作放棄された茶畑の再生プロジェクトにアドバイザーとして参画。耕作放棄茶畑の再生を目指し、地域の人々とともにお茶の栽培・加工に取り組まれています。

情熱と根気が実を結んだ自然栽培の茶畑



「健一自然農園」代表兼
天理市里山地域づくり
アドバイザー
伊川 健一さん

高校生の頃に自然農法について勉強を始めました。高校を卒業してすぐ、農業をするのに適した自然が豊かな場所に行きたいと思い、大和高原で農地を探し始めました。原付バイクを走らせて村人を見つけては「土地を貸してもらえませんか？」と聞いて回っていたところ、知人を介して、都祁にある耕作放棄

された茶畑を借りることができました。当時は、今ほど耕作放棄地は広がっておらず、農地を借りたいという人も珍しかったかもしれません。この耕作放棄地との出会いが「健一自然農園」のはじまりです。

人々との繋がりを大切に

当初は、借りた茶畑でお茶の栽培だけでなく、野菜や米も作っていたんです。しかし、荒廃した茶畑から利益を生むということは本当に至難の業で、20代の頃は何度も挫折しそうになりながら、毎日ひとりで懸命に草取りや開墾に取り組んでいました。ただ、必死でやっていると色んな出会いがあって、要

所々所でアドバイスをしてくださる方が現れるんです。私がお茶づくりに専念しようと思ったのも、自然農法をしている先輩から、「伊川さんの目指しているものを実現するのであれば、お茶づくりに専念した方がいい。」と言われたことがきっかけでした。

お茶の木の枝や茎から作る「三年晩茶」

そしてお茶づくりに専念して数年経った頃、自然食品会社の社長から、「三年晩茶を作ってみませんか？このお茶をやれば『里山を守りたい』など伊川さんのビジョンにつながるかもしれない」と勧められました。「三年晩茶」は、普通のお茶とは違い、3年以上生育したお茶の木の枝や茎を冬に収穫し、丸ごと粉碎して乾燥させ、薪の火でじっくり焙煎して作ります。それまでお茶の木が飲めることを知らなかったので驚きました。当時、私たちがお借りしていた土地には、3年以上のお茶の木がたくさんありましたし、伐採した枝を捨てずに活用でき、しかもおいしい自然栽培のお茶になるというのは魅力的でした。さっそく、「三年晩茶」の生産者をご紹介いただき、大事な原則を学ばせていただき、当園でも生産を始めました。

衰退一途の「福住茶」が息を吹き返す

こうした耕作放棄地の再生や自然栽培によるお茶づくりの実績が認められ、2021年から天理市福住地区の「茶畑再生プロジェクト」にアドバイザーとして携わっています。かつては多くの茶畑があり、「福住茶」という地域ブランド茶を生産していましたが、大型機械の導入により大量生産が進んだことや生産者の高齢化も重なって茶業が衰退し、あと2～3年で「福住茶」



が消滅してしまうという危機的状況でした。

「福住茶を残したいので、力を貸して欲しい」と

お声がけいただき、現在はこの地域の耕作放棄茶畑に残るお茶の木を使い「三年晩茶」を地域の皆さんと一緒に生産しています。また、お茶の焙煎に使う薪は、茶畑の隣にある森林から伐採しています。木材の需要が減り放置されていた森林を間伐することで、美しい里山の風景を守るとともに、土砂災害や獣害のリスクを減らすことにもつながっています。

福住の里山で作られたこのお茶は「里山三年晩茶」と名前を付けました。このお茶には、茶畑の手入れや収穫など、様々な作業に携わってくださった地域の方々の福住町への想いが詰まっています。包装デザインも、福住小中学校の子ども達が描いたイラストになっているんですよ。今では地域の皆さんから声をかけていただくことも増えました。30～40年誰も出入りしていなかった茶畑が綺麗になったことを喜んでおられる姿を見ると、やはりやってきてよかったなと思います。

地域の未来に繋がるように

何年も農業をしていないと、土地が荒れてしまうだけでなく、機械が壊れてしまっていることも多いです。ただ、そのような状態だからこそ一度見つめ直し、今の状態で何ができるのか、未利用になってしまった地域資源をどう活用したらよいかを考えることが大切だと思います。

これまで関わってきた地域を見て感じるの、どんな人でも自分たちのふるさとも残したいという思いを持っているということです。一方で、地域の方だけでは失敗を恐れてしまい1歩踏み出せないことも多いです。そんな地域の方々に対して「もったいないからやりましょう」と言えるのは、よそ者の私たちがだからなのかもしれません。これからも、地域の皆さんが自分たちだけで運営していくにはどうすればいいのかわかるのを一緒に考えさせてもらいながら、地域づくりにお力添えできればと思っています。

